

市 原 市 <sup>こおり</sup>郡 <sup>もと</sup>本 遺 跡

1 9 8 7

市 原 信 用 組 合  
財団法人 市原市文化財センター



# 序 文

市原市は房総半島東京湾岸の中央部に位置しております。原始古代より、房総半島第一の河川である養老川を中心にして、地理的、気候的にも恵まれているため、生活、文化の中心として栄えてきました。その足跡が埋蔵文化財として地下に豊富に眠っているのも本市の大きな特色の一つであり、全国的にも著名な遺跡がいくつもあります。その反面、京葉臨海工業地帯の中核としての発展もめざましく、開発に伴う埋蔵文化財の保存の問題も山積みされており、対策に苦慮しているところであります。そのため、やむを得ない場合において記録保存の処置を取り、開発と埋蔵文化財保護の調整をはかっております。

今回、ここに報告する郡本遺跡は古くから市原郡衛の有力な推定地とされていたため、その重要性を考慮して関係者の御理解のもとに発掘調査を実施しました。今回の発掘調査により、郡本遺跡の重要性がより明らかになり、今後の保護の問題に大いに寄与するものと思われまます。本書は、この調査成果をまとめたもので、学術的な資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護、涵養のために広く一般の方々にも活用されることを望んでやみません。

最後に市原信用組合の御理解、御協力と千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課の御指導に厚くお礼申し上げます。

昭和 62 年 3 月

財団法人 市原市文化財センター  
理事長 星 野 一 郎





# 例 言

1. 本書は、千葉県市原市郡本4丁目103番地他に所在する郡本遺跡の調査報告書である。
2. 調査は、市原信用組合郡本支店建設工事に伴い実施したものである。
3. 発掘調査・整理作業は以下のとおり行った。
  - 発掘調査 昭和61年2月24日～25日（確認調査）  
昭和61年4月9日～24日（本調査）  
担当 石田広美 木對和紀
  - 整理作業 昭和61年6月16日～8月30日  
担当 石田広美
4. 本書の原稿執筆は、木對和紀が行った。
5. 本書に使用した方位は、座標北である。
6. 発掘調査から整理作業の課程で、市原信用組合、千葉県教育庁文化課市原市教育委員会教育指導部文化課の諸機関から御指導・御協力を賜った。厚く御礼申し上げます。

## (財)市原市文化財センター組織表

### 昭和60年度（発掘調査）

#### 役員

理事長 星野一郎(教育委員会教育長)  
 副理事長 横濱辰夫(教育委員会教育指導部長)  
 常務理事 内藤 隆(専任)  
 理事 滝口 宏(早稲田大学名誉教授)  
 理事 寺村光晴(和洋女子大学教授)  
 理事 海上信久(姉崎神社宮司)  
 理事 松崎良一(市企画部長)  
 理事 斎藤栄亮(市総務部長)  
 理事 中島英夫(市都市部長)  
 理事 松下 隆(市総務部財政課長)  
 監事 白鳥一夫(市会計課長)  
 監事 松本辰之助(教育委員会総務課長)

#### 職員

庶務課	課長	田丸萬富
	主事	大鐘光江
	事務員(嘱託)	秋田晴美
	事務員(嘱託)	藤澤ひとみ
	事務員(嘱託)	石渡あゆみ
調査課	課長	清藤一順
	主幹	石田広美
	主幹	山口直樹
	主任調査研究員	宮本敬一
	調査研究員	米田耕之助
	調査研究員	田中清美
	調査研究員	浅利幸一
	調査研究員	大村 直
	調査研究員	近藤 敏
	調査研究員	高橋康男
	調査研究員	田所 真
	調査研究員	浅利幸一
	調査研究員	大村 直
	調査研究員	木對和紀
	調査研究員(嘱託)	鈴木英啓
	調査研究員(嘱託)	半田堅三
	調査研究員(嘱託)	田中新史
	事務員(嘱託)	高浦貞子

### 昭和61年度(発掘調査・整理作業)

#### 役員

理事長 星野一郎(教育委員会教育長)  
 副理事長 横濱辰夫(教育委員会教育指導部長)  
 常務理事 岩見一民(専任)  
 理事 滝口 宏(早稲田大学名誉教授)  
 理事 寺村光晴(和洋女子大学教授)  
 理事 海上信久(姉崎神社宮司)  
 理事 松崎良一(市企画部長)  
 理事 斎藤栄亮(市総務部長)  
 理事 地引希彦(市都市部長)  
 理事 松下 隆(市総務部財政課長)  
 監事 斎藤崇雄(教育委員会総務課長)  
 監事 白鳥一夫(市会計課長)

#### 職員

庶務課	課長	田丸萬富
	主事	大鐘光江
	事務員(嘱託)	秋田晴美
	事務員(嘱託)	石渡あゆみ
調査課	課長	清藤一順
	主幹	石田広美
	主幹	山口直樹
	主任調査研究員	宮本敬一
	主任調査研究員	米田耕之助
	調査研究員	田中清美
	調査研究員	浅利幸一
	調査研究員	大村 直
	調査研究員	近藤 敏
	調査研究員	高橋康男
	調査研究員	田所 真
	調査研究員	浅利幸一
	調査研究員	大村 直
	調査研究員	木對和紀
	調査研究員(嘱託)	田中新史
	調査研究員(嘱託)	半田堅三
	調査研究員(嘱託)	鈴木英啓
	事務員(嘱託)	高浦貞子
	事務員(嘱託)	長谷川いづみ

# 本文目次

序文

例言

財団法人市原市文化財センター組織表

## 第1章 序説

I 調査に至る経緯と経過…………… 1

II 遺跡の位置と環境…………… 1

## 第2章 遺構と遺物…………… 1

1号遺構…………… 1

2号遺構…………… 5

3号遺構…………… 5

4号遺構…………… 5

5号遺構…………… 5

6号遺構…………… 6

7号遺構…………… 6

8号遺構…………… 7

9号遺構…………… 7

10号遺構…………… 7

11号遺構…………… 10

## 第3章 まとめ…………… 10

# 挿図目次

第1図 遺跡位置図…………… 2

第2図 周辺地形図…………… 3

第3図 郡本遺跡遺構配置図…………… 4

第4図 出土遺物実測図1…………… 8

第5図 出土遺物実測図2…………… 9

第6図 出土遺物実測図3…………… 10

# 表目次

郡本遺跡新旧遺構番号一覧表…………… 4

## 図 版 目 次

- 図版 1 北側より  
東側より
- 図版 2 1号・2号遺構全景  
3号・4号・9号遺構
- 図版 3 5～8号遺構遺物出土状況 西側より  
5～7号遺構遺物出土状況 南側より
- 図版 4 出土遺物 1
- 図版 5 出土遺物 2
- 図版 6 出土遺物

尚、報告書挿図・図版に使用した遺物番号は報告書作成時に、調査時遺物番号を下記のごとく変更していることを申し加えておく。

報告遺物番号	調査時遺物番号	報告遺物番号	調査時遺物番号	報告遺物番号	調査時遺物番号
4-1	SI7-1・2	6-4	SI8-19	7-10	SI3-47・48
5-1	SI2-10	6-5	SI8-7・30・カマド	7-11	SI3-62
5-2	SI2-カマド	6-6	SI8-29	7-12	SI3-31
5-3	SI2-18・24・25	7-1	SI3-1	7-13	SI3-53
5-4	SI2-一括	7-2	SI3-18・63・106	7-14	SI3-6
5-5	SI2-12	7-3	SI3-44	7-15	SI3-一括
5-6	SI2-一括	7-4	SI3-10・14・22・105・カマド	7-16	SI3-9・一括
5-7	SI2-13	7-5	SI3-一括	7-17	SI3-8
5-8	SI2-一括	7-6	SI3-一括	7-18	SI3-37
6-1	SI8-12・13	7-7	SI3-28	8-1	SI6-一括
6-2	SI8-11	7-8	SI3-7	9-1	SI4-一括
6-3	SI8-36	7-9	SI3-55	9-2	SI4-一括

# 第1章 序 説

## I 調査に至る経緯と経過

市川市郡本地先において、市原信用組合新店舗建設に先がけて昭和60年11月26日付けで「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会が、千葉県教育委員会及び市原市教育委員会あてに提出された。これを受けて現地踏査等を行ない、昭和60年12月21日付けで千葉県教育委員会教育長より「土師器散布地」1ヶ所が所在する旨の回答がなされた。このことから千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課、市原信用組合の三者は埋蔵文化財の取扱いについての協議を行ない、対象地域内に所在する遺跡については発掘調査を行ない、記録保存とすることで結論づけられた。

発掘調査は、財団法人市原市文化財センターの受託事業として行ない、下記の日程をもって終了した。

昭和61年2月24日～25日（確認調査）

昭和61年4月9日～24日（本調査）

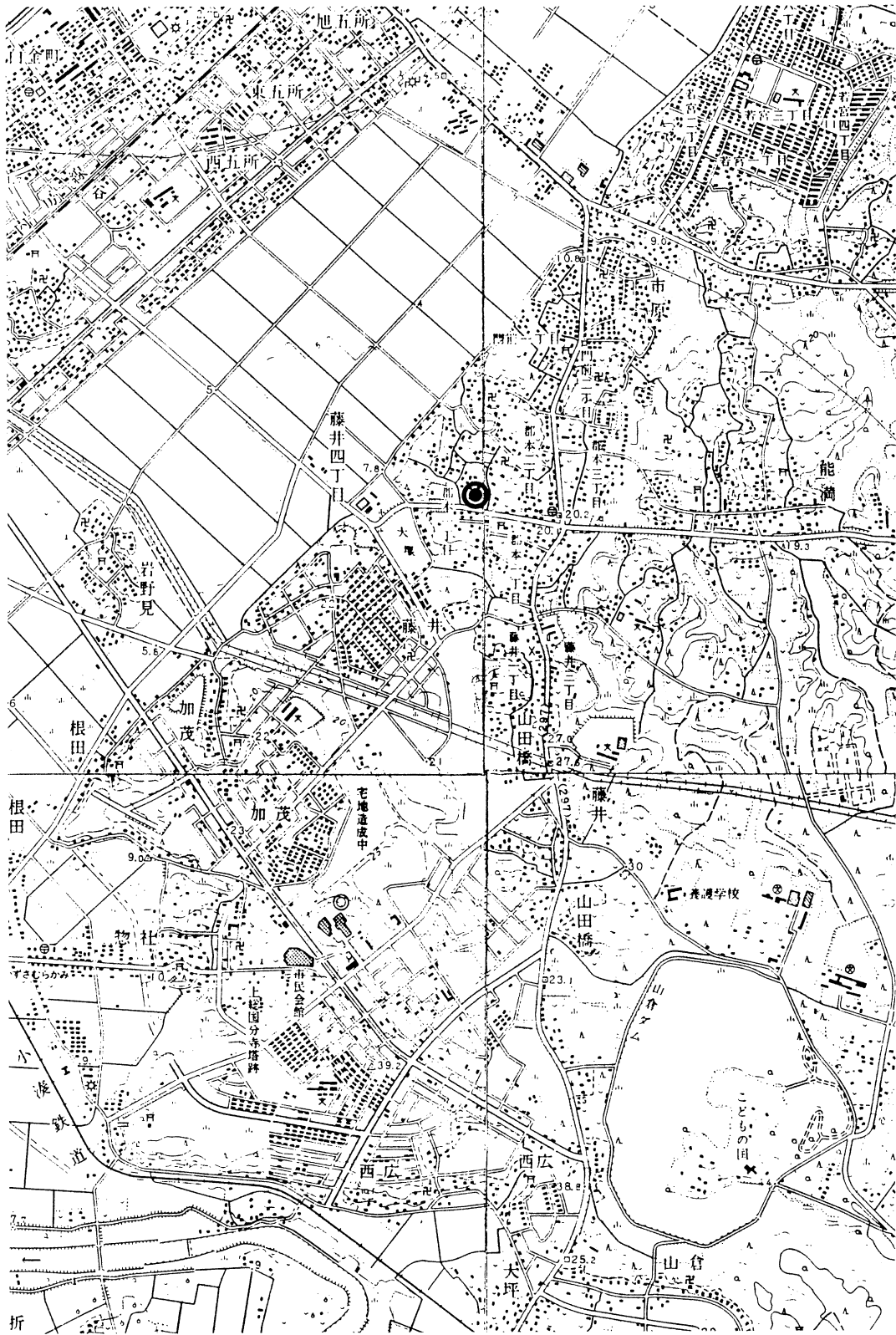
## II 遺跡の位置と環境

郡本遺跡は標高およそ21mの台地上に存在し、周辺地域は地名と八幡神社に散在している巨大な礎石等の存在により、市原郡衙の有力推定地の1つになっており、昭和38年に上総国府関係遺跡として一部の調査を実施している。今回の調査区域は遺跡の中心地域と思われる八幡神社本殿から北西方向に直線距離にしておよそ150mの地点であり、発掘調査対象区域は360m<sup>2</sup>であった。また遺跡西側の台地突端部に位置する三島台遺跡においては、周知の人面土器が検出されているなど、周辺地域における歴史的環境についても興味深いものがある。詳細については、周辺地域における発掘調査例が乏しく、今後周辺の調査例の増加と共により明瞭にされることであろう。

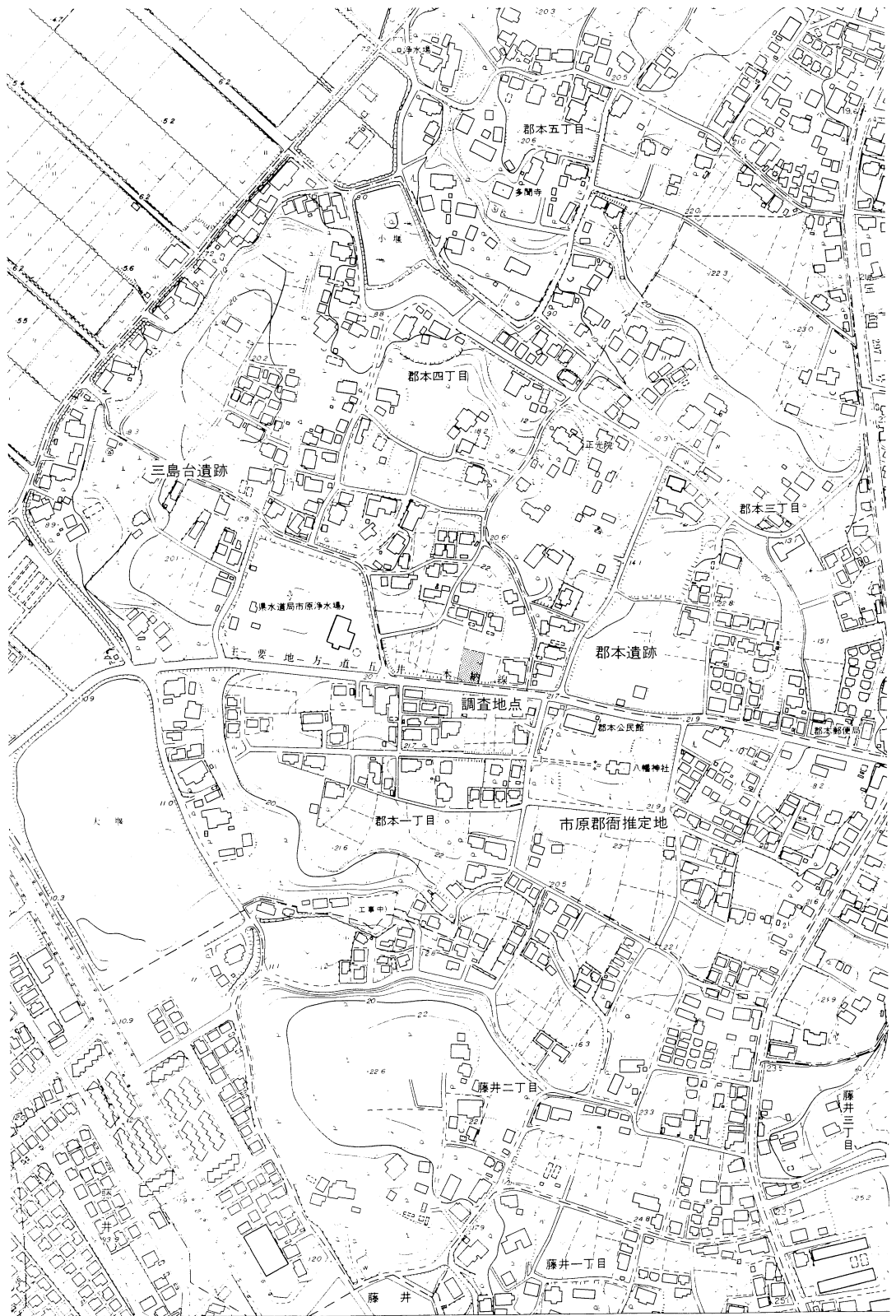
# 第2章 遺構と遺物

## 1号遺構（第3図・図版1・2）

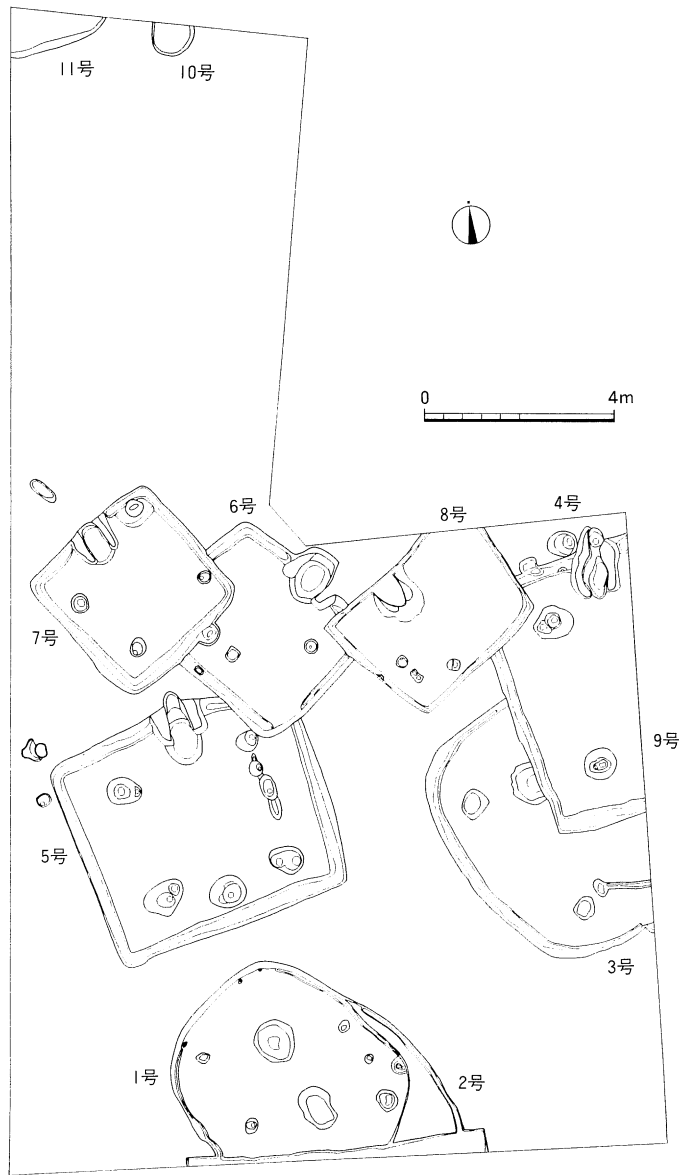
調査区域南端中央に2号遺構を切って存在し、残存長径4.86m、短径4.15m前後の楕円形を呈し、炉長軸方位はN-36°-Wを示す。確認面からの掘り込みは15～20cm前後を測り、床面は全体的によく踏み固まっている。周溝は全周せず北及び南側に検出されていないが、存在する所の深さは10～12cm前後を測る。pitは合計6本検出されているが、北側の2本を除けば、本遺



第1図 遺跡位置図 (1:25,000)



第2図 周辺地形図 (1 : 5,000)



第3図 郡本遺跡遺構配置図（1：160）

郡本遺跡新旧遺構番号一覧表

報告書遺構番号		調査時遺構番号	報告書遺構番号		調査時遺構番号
1号遺構	←	1号遺構	7号遺構	←	3号遺構
2号遺構	←	9号遺構	8号遺構	←	6号遺構
3号遺構	←	5号遺構	9号遺構	←	4号遺構
4号遺構	←	7号遺構	10号遺構	←	10号遺構
5号遺構	←	2号遺構	11号遺構	←	11号遺構
6号遺構	←	8号遺構			



構に削平された2号遺構のpitも含まれているものと考えられ、深さは床面よりそれぞれ20～35cm前後を測る。炉は中央北側に検出され、よく焼けている。壁はやや緩やかに立ち上り、覆土は自然堆積の状況を示す。

**遺物** 弥生時代後期に比定される細片数点が検出されたのみで、図示に到るものはない。

#### 2号遺構（第3図・図版1・2）

1号遺構東側に、大部分を1号遺構及び現道部分に削平されて存在する。1号遺構炉南側より検出された炉跡残存痕跡及び残存する東壁部分より推定される平面形は、楕円形を呈するものと考えられ、炉残存痕跡長軸方位はN-30°-Wを示している。残存する床面は比較的よく踏み固まっているもののpit等は存在せず、南側の大部分（トレンチ状のもの）は、1号遺構と共に現道工事に伴いすでに削平されており、依存状況は極めて不良である。

**遺物** 覆土がほとんど存在しておらず、検出される遺物も弥生時代後期に比定される細片数点のみであり、図示に到るものはない。

#### 3号遺構（第3図・図版1・2）

調査区域東端部に位置し、5号遺構に $\frac{1}{4}$ 近くを削平されて存在するものの、炉の $\frac{1}{2}$ 強及び2本の支柱穴を検出し、長軸5.5m前後、長軸方位はN-37°-Wを示しているものと考えられる。確認面からの掘り込みの深さは20cm前後を測り、残存する周溝は深さ6cm前後で検出範囲全面に及んでいる。床面は全体的によく踏み固められており、炉は中央北側に存在しよく焼けている。柱穴は北側65cm、南側61cm前後の深さを測り、南側のものには明瞭な柱痕跡が認められた。この他、南側中央部に間仕切状の溝が深さ4cmを測り検出されている。

**遺物** 弥生時代後期に比定される細片10点が検出されたが、図示に到るものはない。

#### 4号遺構（第3・4図・図版1・2・4）

調査区域北東端に位置し、5・9号遺構に大部分を削平されて存在する。規模、形状は不明ながら9号遺構カマド脇によく焼けた炉址を検出し、床面も硬化していることから、住居跡と判断してよいものと考えられる。

**遺物** 炉付近より第4図4-1の壺形土器を、床面密着の状況で検出したのみである。

#### 5号遺構（第3・4図・図版1・3・4）

6号遺構に一部削平されて存在する。主軸方位はN-16°-Wを示し、残存する西壁・南壁はそれぞれ4.5・5.0mを測り、東西方向にやや長い長方形を呈している。確認面からの掘り込み

は北壁に接して構築されており、良質の粘土が使用されているものの、両袖の前面は遺存状況が不良である。支柱穴は4本検出され、深さはそれぞれ52cm前後で均一的であり、北東コーナー部の一本を除けば、いずれの pit にも2本ずつの柱痕跡が認められ、あるいは拡張が行われた可能性がある。南壁側中央部のもは入口施設に伴うものと考えられ、深さは46cmを測り、底面に明瞭な柱痕跡を有している。この他東側柱穴間に間仕切状の pit 列が存在し、深さは4～30cm前後を測り、中央部が概して深い傾向が認められた。周溝は本遺構よりやや掘り込みの浅い6号遺構貼床下からも検出され、幅20cm、深さ7cm前後で全周している。

**遺物** 合計8点の図示可能遺物が検出された。これらの遺物はカマド周辺の床面密着～10cm前後浮いた状況で検出されたものである。

#### 6号遺構（第3・4図・図版1・3）

5号遺構を切り、7・8号遺構に削平されて存在する。主軸方位はN-50°-Wを示し、残存する東壁、南壁の規模はそれぞれ3.5・3.12mを測り、東壁の方がやや長方形を呈している。確認面からの掘り込みの深さは20cm前後を測り、壁面は比較的良好に踏み固まっている。カマドは東壁に接して構築されているが、左袖部を欠くなど遺存状況はいささか不良である。pitは3本検出されているが、西側の2本が深さ35cm前後でやや深い以外は、15cm前後と浅く、いずれの pit よりも柱痕跡は認められなかった。

**遺物** カマド周辺部の床直上～20cm程浮いた状況で100点以上の遺物が検出されたが、全体の40%程の複原までのものが多い。このうち図示に到った遺物はいずれも10～15cm程床面から浮いた状況で検出されたものばかりで、時期差を有することから、いずれが本遺構に伴うかは不明である。

#### 7号遺構（第3・4・5図・図版1・3・4・5・6）

6号遺構を削平して存在する。平面形は3.21×3.13mの南北方向にやや長い方形を呈し、主軸方位はN-37°-Wを示している。確認面からの掘り込みの深さは24cm前後を測り、床面は比較的良好に踏み固まっている。カマドは北壁中央に接して構築されており、良質の粘土が使用されている。またカマド両袖中央部より85cm程壁を離れた所に、粘土ブロックを多量に含む落ち込みが幅24cm、長さ64cm、深さ14cmに渡って、検出されており、あるいは本遺構カマドに伴う煙道端部と考えられた。pitは3本検出され、西側の2本は24cm前後、東側の1本は15cm前後の深さを測り、いずれの pit にも明瞭な柱痕跡が検出されている。この他カマド右袖の横に径1.4m、深さ24cm程の貯蔵穴と考えられる落ち込みが検出されており、内部より極めて多量の遺物が検出されている。

**遺物** カマド周辺及び貯蔵穴内に多量の遺物が検出され、いずれも本遺構に直接伴うものと考えられる。7-1は10cm程床面から浮いた状況で検出された金銅製の帯金具であり、本体は2.5×2.8cmの方形を呈し、厚さ0.6cmを測り断面は台形を呈している。裏面に厚さ1mmのあて金を有し、4点の鉾によって本体と接合している。

#### 8号遺構（第3・5図・図版1・2・4）

6・9号遺構の一部に貼床をもって構築されており、平面形は2.8×3.6mの東西方向にやや長い台形状を呈し、主軸方位はN-43°-Wを示している。覆土はほとんど存在しておらず、北壁中央やや西側にカマド残存痕跡がわずかに認められた。床面はこのカマド残存痕跡の前面に硬化した面をわずかにとどめる以外はすでに喪失しており、遺存状況は極めて不良である。この他本遺構に直接伴うかどうか不明ながら、床面下に3本のpitが検出され、深さは北から順に25cm、28cm、11cmを測る。

**遺物** 覆土の大半を失っている為、図示に到った遺物は最も浅い南側pit中から検出された1点のみである。（8-1）

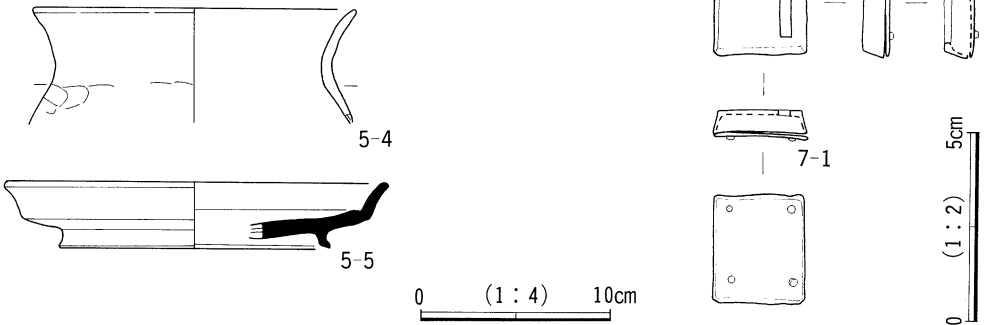
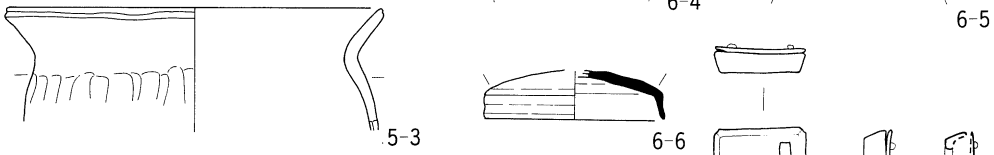
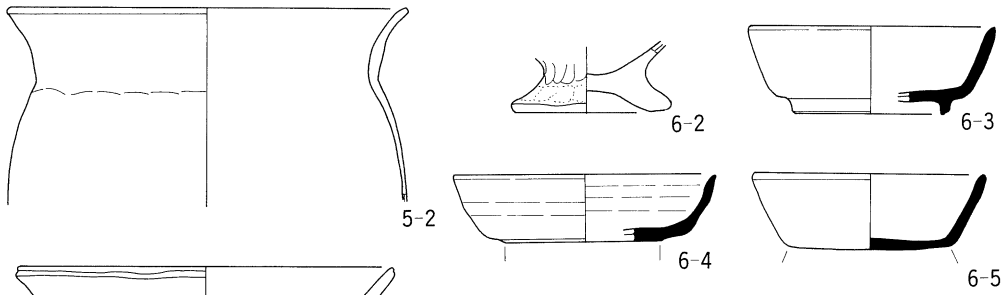
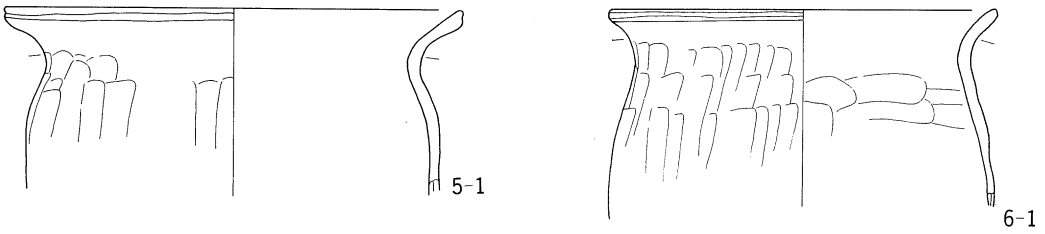
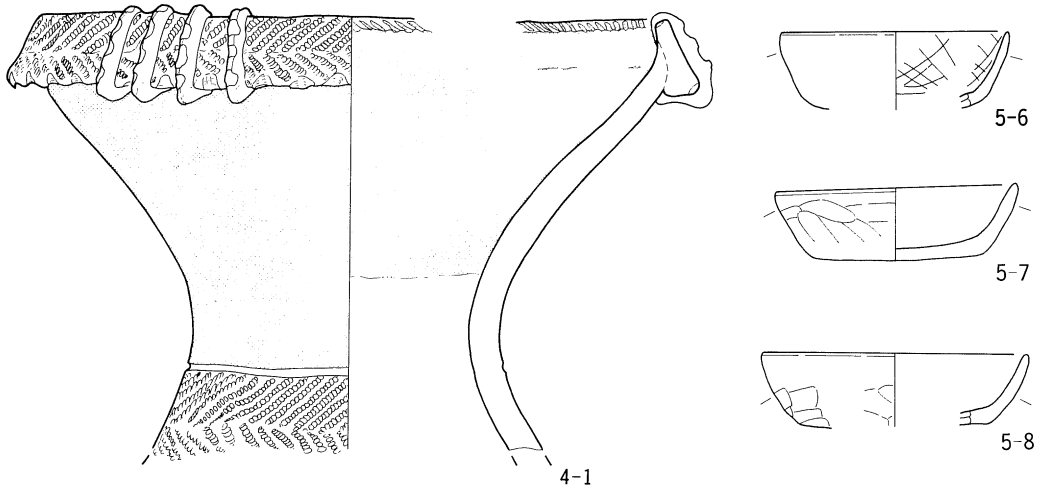
#### 9号遺構（第3・5・6図・図版1・2・4・6）

3・4号遺構を切り、8号遺構の床面の一部が北西コーナー部に及んで検出されていることから、8号遺構よりも古い時期の住居跡であることは明瞭である。しかしながら、本遺構は今回の調査された遺構のうちでも、最も掘り込みが深く、8号遺構貼床部の下に、明瞭な本遺構の壁面が検出されている。平面形は正方形を呈するものと考えられ、西側両コーナー部を検出した西壁の一边は5.1mを測り、確認面からの掘り込みの深さは50cm前後を測る。床面は全体的によく踏み固められており、カマドは北壁に接して構築されており、すこぶる良質の粘土が使用されている。柱穴は2本検出されており、深さはいずれも57cmを測る。底面にはそれぞれ2本ずつの柱痕跡を有しており、あるいは拡張が行われた可能性がある。検出面における周溝は、幅15~20cm、深さ7cm前後に渡って全周しており、西壁傾き方位はN-12°-Wを示す。

**遺物** 床面よりかなり高い位置で検出された須恵器（9-1）と、第6図に図示した鉄製鎌（9-2）が西壁際より検出されている。

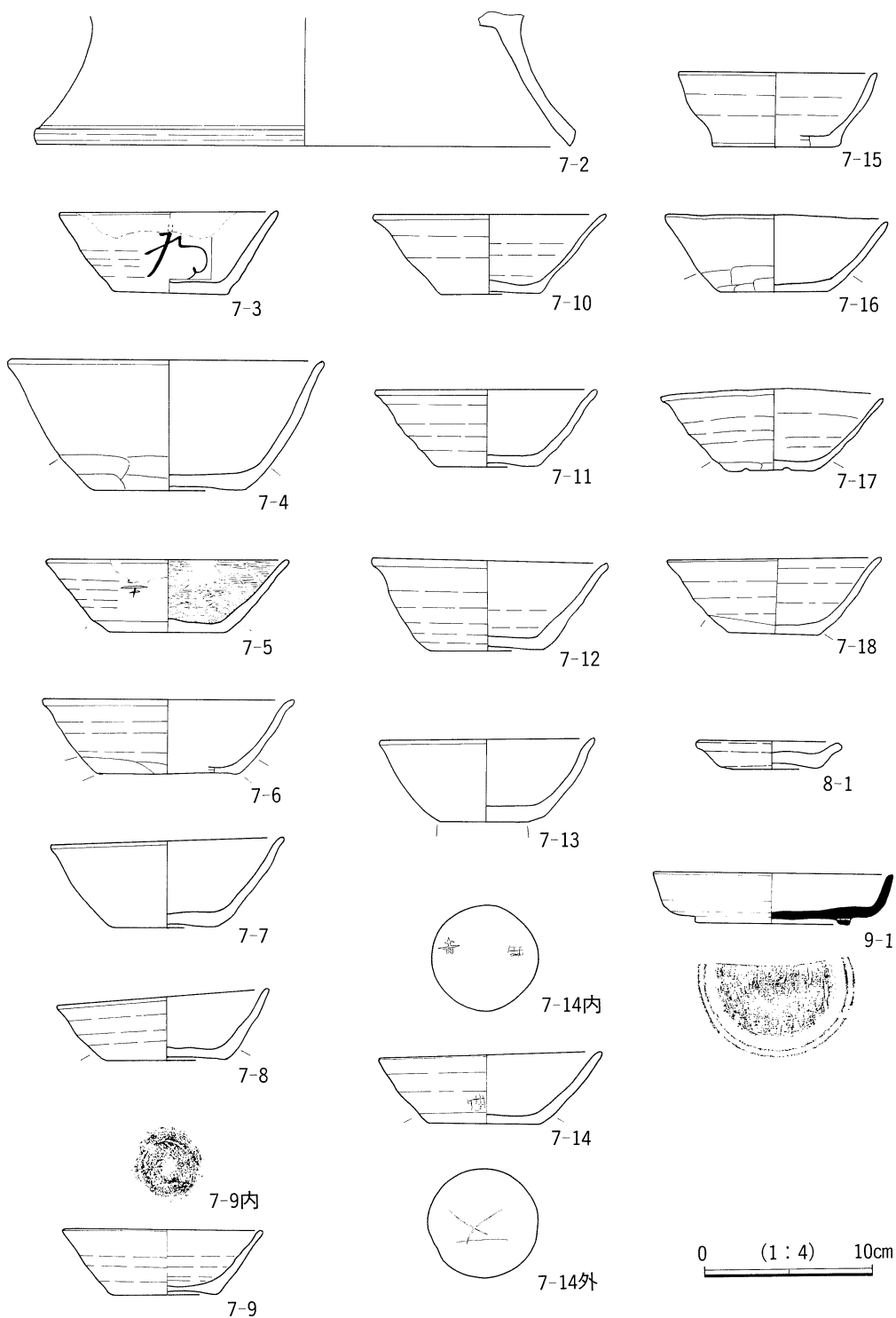
#### 10号遺構（第3図）

調査区域北端中央部に径85cm、深さ5cm前後の円形プランを持って検出されている。壁断面によればII層を掘り込んで構築されており、底面に縄文土器細片1点を検出することから、あるいは縄文時代の土坑かと推定される。

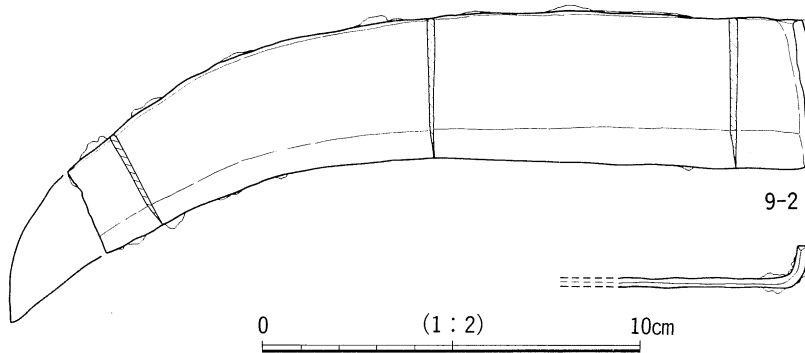


0 (1:4) 10cm

第4図 出土遺物実測図1



第5図 出土遺物実測図2



第6図 出土遺物実測図3

### 11号遺構 (第3図)

10号西隣に位置し、調査区域北西コーナー際に全体の $\frac{1}{4}$ 程を検出しているものと考えられる。当初住居跡等の遺構かと思われたが、底面は平坦であるものの床面及び周溝が存在せず、壁立ち上りも緩やかであることから、土墳的なものと考えられる。北及び西壁で検出された掘り込み規模はそれぞれ1.95m、0.95m、深さは10cm前後を測る。遺物はまったく検出されなかった。

## 第3章 まとめ

郡本遺跡周辺地域は市原郡衙の有力推定地の1つであるが、今回のわずか360m<sup>2</sup>における調査範囲内においては礎石及び掘立柱建物群などの直接郡衙に関連する遺構は検出されなかった。しかしながら、7号・9号遺構に認められた墨書や線刻文字あるいは金銅製帯金具などの存在等から、周辺地域にこれら遺物に関する遺構の存在を暗示しているものと推定される。また9号遺構より「吉」文字を線刻した土器が数点検出されていることなどは注目に値すべきことであり、今後この地の調査においては十分な注意が必要であろう。

郡本遺跡出土遺物観察表

図番	器種 遺存度	法量(推定)cm			焼成	色調	胎度	整形・調整等	備考
		口径	底径	器高					
4-1	壺 $\frac{2}{5}$	(16.7)	—	—	良好	明褐色	密	外口縁部羽状縄文、口縁下～ナデ以下沈線まで、主に縦位のヘラ刷り込み 内口線のくびれ部ナデ、以下赤彩部は横位のヘラ刷り込み、無彩部横ヘラナデ	赤彩、棒状浮文4連×4ヶ所

図番	器種 遺存度	法量(推定)cm			焼成	色調	胎度	整形・調整等	備考
		口径	底径	器高					
5-1	甕 <sup>3</sup> / <sub>10</sub> (甗)	(24.0)	—	—	良好	外淡褐色 内暗褐色	密	外口縁部横ナデ、指頭左痕、胴部縦ヘラケズリ 内口縁部横ナデ・部分のナデツケ、胴部横位の入念なヘラナデ	
5-2	甕 <sup>2</sup> / <sub>5</sub>	(21.0)	—	—	良好	外暗～淡褐色 内暗茶褐色	密	外口縁部横ナデ、全面指頭左痕かすかに残る。頸部以上に黒褐色のカーボン付着、胴部縦ヘラケズリ後入念な横ヘラケズリ。 内上位に横位の荒いナデ痕残る。ほぼ全面入念なナデ	
5-3	甕 <sup>1</sup> / <sub>2</sub> 弱 (甗)	(20.0)	—	—	良好	淡褐色	密	外口縁部指頭押圧後横位ナデ、胴部巾狭の縦ヘラケズリ 内横位のヘラナデツケ・入念なヘラナデ(ヘラ当て痕あり)	
5-4	甕 口縁部のみ	(19.0)	—	—	良好	外褐色内 明茶褐色	密	外口縁部横ナデ指頭痕残る。胴部横ヘラケズリ 内入念な横ナデ	
5-5	高台付皿 須恵器 <sup>1</sup> / <sub>2</sub> 弱	(20.0)	(14.2)	(3.2)	良好	明灰色	密	中心部やや荒い回転ナデ	ロクロ挽き
5-6	坏 <sup>1</sup> / <sub>10</sub>	(12.0)	—	—	良好	明褐色	密	外口唇部横ナデ体部ヘラケズリ、全面磨耗激しい 内不規則な斜行格子暗文	
5-7	坏 <sup>4</sup> / <sub>5</sub>	12.8	9.0	4.0	良好	外褐色内 明褐色	密	外口唇部横ナデ、体部斜め横のヘラケズリ、底部一方向のヘラケズリ又はナデ 内横ナデ～ナデ	
5-8	坏 <sup>1</sup> / <sub>5</sub>	(14.0)	(10.0)	(3.9)	良好	外明褐色 内明褐色	密	外口唇部横ナデ、体部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ 内口唇部欠く、体部全面横ナデ、底部ナデ	
6-1	甕 <sup>1</sup> / <sub>2</sub> 弱	(20.0)	—	—	良好	明褐色 ～暗褐色	密	外口縁部横ナデ、頸部指頭押圧後縦ヘラケズリ後横ナデ胴部強いヘラケズリ後ナデツケ 内口唇部不明瞭な陵～横ナデ、胴部横ヘラナデ	内面口縁部に粟のこげ付き状の付着物あり
6-2	台付甕 台部のみ	—	8.5	—	良好	明褐色 ～褐色	密	外指頭押圧及びナデツケ～ナデ ～ヘラナデツケ 内入念なナデ	
6-3	高台付 須恵器 <sup>2</sup> / <sub>5</sub>	13.0	8.4	4.5	良好	外淡茶褐色 内茶褐色	密	外全面入念なミガキ、高台部強いナデツケ 内全面入念なミガキ	
6-4	坏 須恵器 <sup>2</sup> / <sub>5</sub>	(14.0)	(8.5)	4.5	良好	明灰色	密	底隊回転ヘラケズリ	ロクロ挽き
6-5	坏底部 口縁部 須恵器 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	(12.5)	9.0	(4.05)	良好	灰褐色	密	底部回転ヘラケズリ(磨耗激しい)	ロクロ挽き 外面火襷あり
6-6	蓋 須恵器 <sup>2</sup> / <sub>5</sub>	(9.5)	—	(2.5)	良好	暗灰色	密	回転ヘラナデ	
7-1	帯金具 銅製	—	—	—	—	黒褐色	—	表面かすかに鍍金残る。 裏面よく残る。表裏共に緑青及び有機質の付着物あり。	本体横28 <sup>m</sup> <sub>m</sub> 、裏当金 縦24.5 <sup>m</sup> <sub>m</sub> 、高1.0 <sup>m</sup> <sub>m</sub> 高5.8 <sup>m</sup> <sub>m</sub>
7-2	高坏 脚部のみ	—	(3.2)	—	良好	外明褐色 淡茶褐色 内褐色	密	外横ナデ～指頭押圧、裾横ナデ 内ナデ及びヘラナデツケ～横ナデ	
7-3	甕 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>	13.0	6.8	5.0	良好	内外淡褐色	密	外底部回転糸切り	ロクロR 外面墨書有
7-4	坏 <sup>9</sup> / <sub>10</sub>	18.8	9.0	7.8	良好	外淡茶褐色 ～暗褐色 内暗茶褐色	密	外ヘラナデツケ又はケズリ、ナデに近い 底部回転ヘラケズリ 内体部に植物種類の抜けた痕があるが、米ではない様だ。	ロクロL 外面底部と口唇部に二次的な薄いカーボン付着 内面(黒彩)

図番	器種 遺存度	法量(推定)cm			焼成	色調	胎度	整形・調整等	備考
		口径	底径	器高					
7-5	坏 $\frac{2}{5}$	(15.0)	(7.0)	4.4	良好	外黒褐色 ~淡褐色 内黒色	密	外ヘラナデツケ又はケズリ、底部 ヘラケズリ 内横斜めミガキ、底部変則的な格 子状のミガキ	ロクロL 内面(黒彩) 外面線刻文字「吉」か?
7-6	坏 $\frac{3}{10}$	(15.0)	(8.5)	4.4	良好	外淡褐色 内黒色	密	外ヘラケズリ又はナデツケ、底部 回転糸切り後、一方向のヘラナデ ツケ 内横斜めのミガキ	ロクロ挽き 内面(黒彩)
7-7	坏 完形	13.9	6.0~ 6.5	4.7~ 5.2	良好	淡褐色 外底部 暗褐色	密	外薄く不明瞭なヘラナデ、底部糸 切り(静止状態で凹凸各 $2\frac{0}{10}$ mm) 内かすかな輪積痕残る	ロクロR
7-8	坏 完形	11~13.0	7.2	3.2~ 4.2	良好	淡褐色 ~淡赤褐 色	密	外ヘラケズリ、底部回転ヘラケズ リ	ロクロL
7-9	坏 口縁一部 欠	12.1	6.5	3.8 ~4.0	良好	内外共淡 褐色 外一部明 茶褐色	密	外底部回転糸切り	ロクロR 内面線刻文字「吉」
7-10	坏 $\frac{9}{10}$	13.3	6.2	4.5	良好	内外共明 茶褐色一 部外淡赤 褐色	密	外底部回転糸切り一部ハミ出しあ り	ロクロR
7-11	坏 $\frac{1}{5}$	(14.0)	6.2	4.6	良好	明褐色 ~褐色	密	外底部回転糸切り	ロクロR
7-12	坏 $\frac{7}{10}$	14.3	6.8	5.0~ 5.5	良好	明褐色 一部 赤褐色	密	外底部回転糸切り 内体部輪積痕あり	ロクロR
7-13	坏 $\frac{3}{5}$	13.0	5.2	4.6~ 4.9	良好	内外共 明褐色	密	内外共良好なロクロ挽き、一部分 ヘラナデツケ、底部回転ヘラケズ リ及びナデ	ロクロL
7-14	坏 完形	13.5	6.6	3.8~ 4.6	良好	外明褐色 ~褐色 内明茶褐 色~茶褐 色	密	外ヘラナデツケ。底部回転糸切り 後ヘラケズリ	ロクロL 内面線刻文字「吉」及 び意味不明の二文字 外面「丈」?及び意味不 明線刻文字
7-15	坏 $\frac{1}{5}$	(12.0)	(7.5)	—	良好	内外共明 茶褐色	密	外底部ハミ出しナデ~回転糸切り	ロクロR 二次的なカーボン付着
7-16	坏 $\frac{4}{5}$	11~14	6.4	4.2~ 4.6	良好	内外共明 ~暗褐色	密	外ヘラケズリ~底部回転糸切り後 一方向ヘラケズリ 内重ね痕残る。他器の粘土付着 底部付近指頭で1回転	二次的な加熱痕あり
7-17	坏 $\frac{7}{10}$	13.4	5.3	4.4~ 4.8	良好	内外共明 褐~褐色	密	外ヘラケズリ~底部回転ヘラケズ リ、ウズ巻状の太い回転沈線入る	ロクロL 一部二次的な吸炭部と 有機質が付着
7-18	坏 $\frac{1}{2}$ 弱	12.7	4.9	5.2	良好	外茶~暗 褐色 内黒~暗 褐色	密	胴下端~底部回転ヘラケズリ	ロクロR
8-1	皿 $\frac{4}{5}$	8.8	6.0	1.6	良好	淡褐色	密	外底部回転糸切り	ロクロ挽き 内外特に内面斑点状の カーボン付着
9-1	高台付坏 口縁部 底須恵 器	(14.2)	(9.1)	3.0	良好	青灰色	密	体部下半回転ヘラケズリ後、高台 貼付	底部外面線刻文字有
9-2	鎌							長さ19.6cm、厚さ2.0cm、幅 4.0~2.5cm、重量96g	



写 真 图 版





北側より



東側より



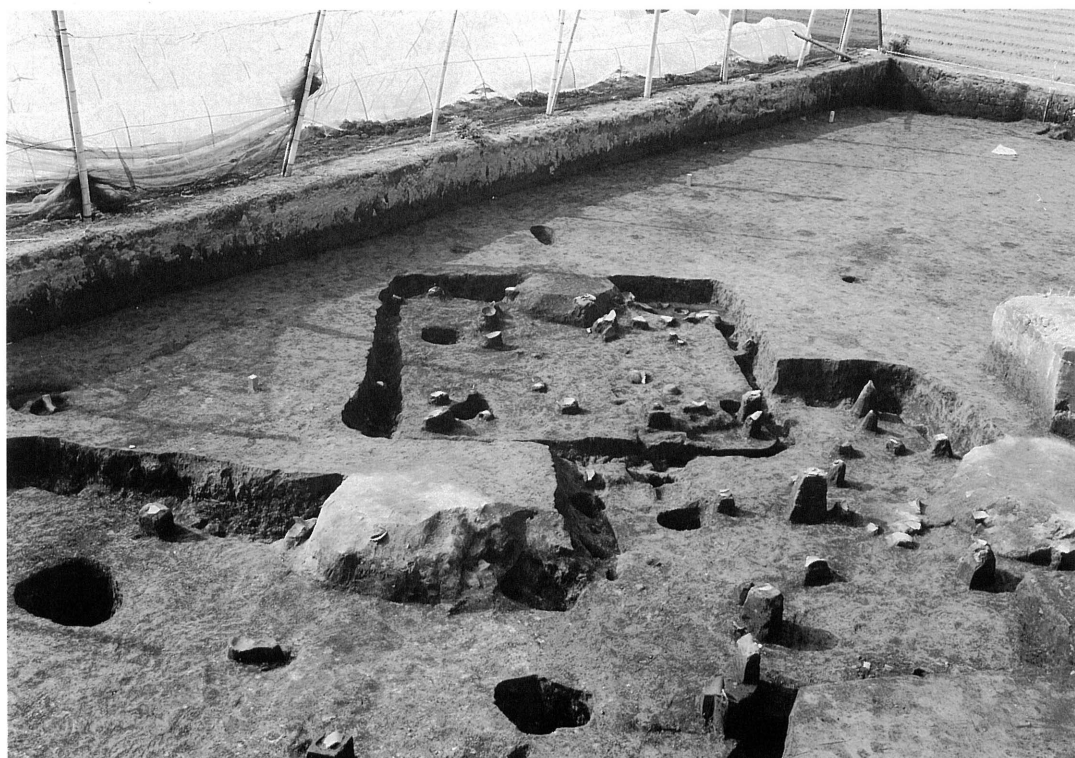
1号・2号遺構全景(手前トレンチは道路工事によりすでに削平された箇所。)



3号・4号・9号遺構

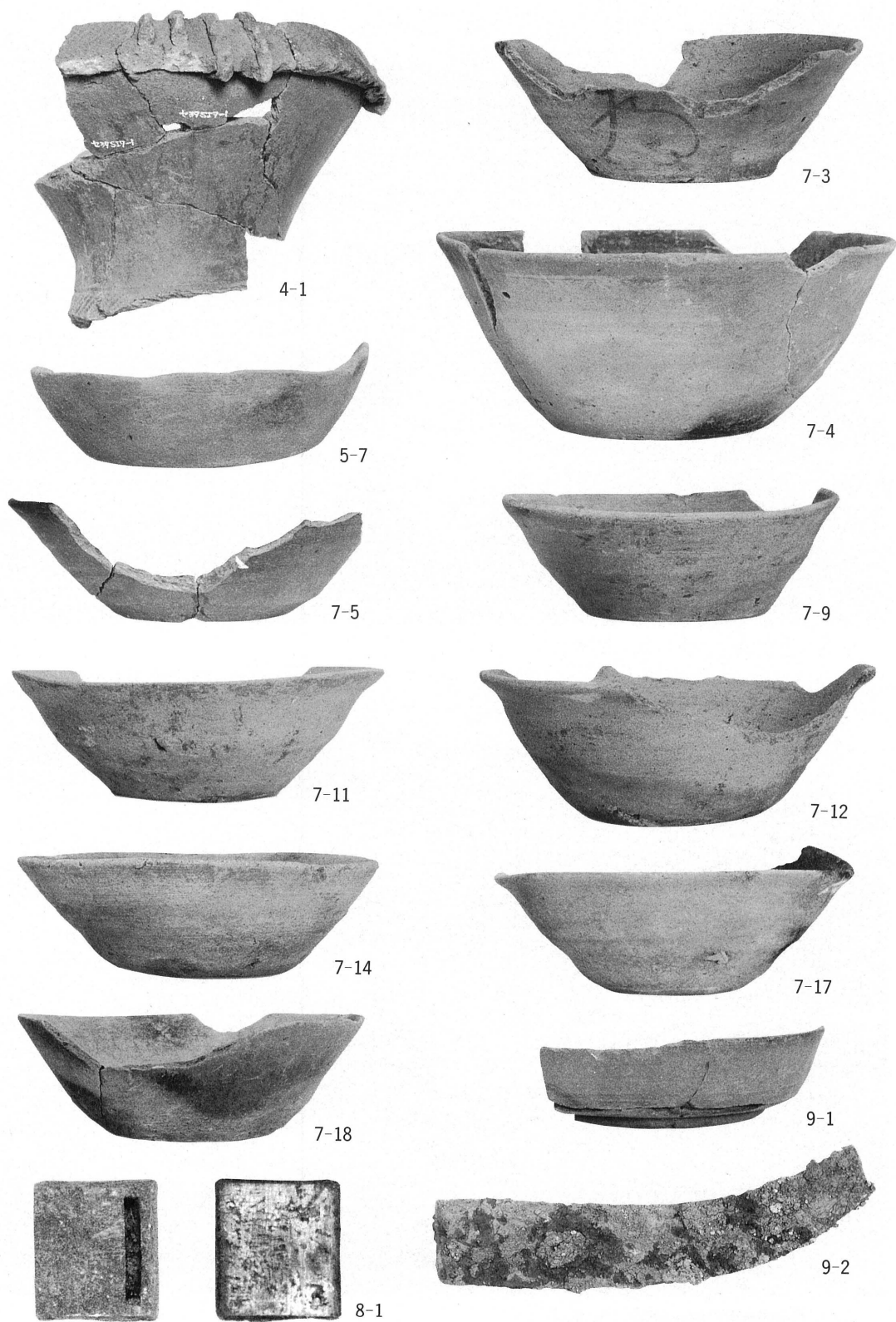


5~8号遺構遺物出土状況 西側より



5~7号遺構遺物出土状況 南側より





出土遺物 1



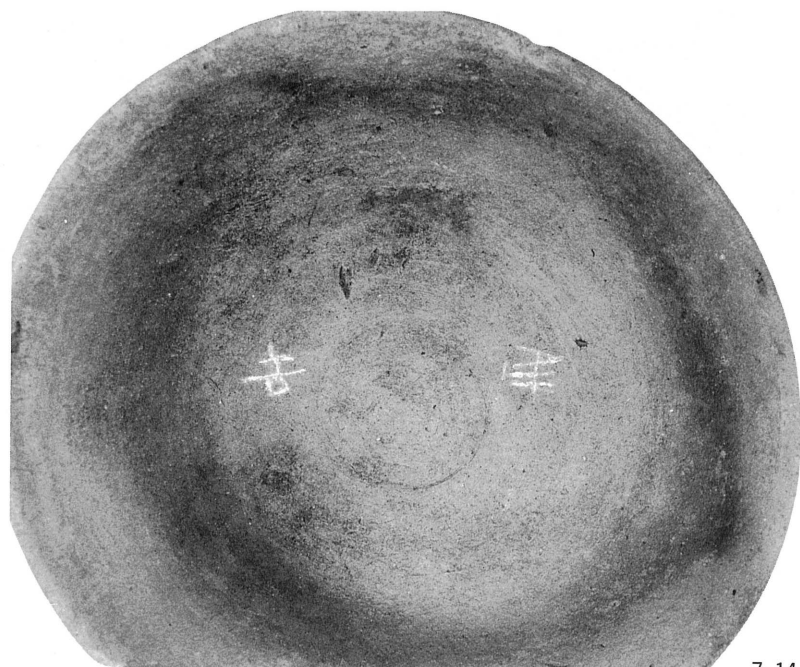
7-3



7-5



7-9



7-14



7-14



9-1



財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第14集

## 市原市郡本遺跡

昭和62年3月25日 印刷

昭和62年3月30日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター

発行 市原信用組合

財団法人 市原市文化財センター

千葉県市原市馬立817番地

TEL 0436 (95) 2755

印刷 株式会社 弘文社

千葉県市川市市川南2-7-2

TEL 0473 (24) 5977